

は人生の自由を束縛するやうに考へ、ラ氏は人生の全的幸福を享受するための必要事件と考へた。結婚生活は、我國のやうに家本位の組織の社會に於いては、時にシヨ氏の見方のやうな感を起させることがあふんあらうけれども、それは人間の一時の我儘な考へに他ならぬ。少しく思ひをひそめた時には、直ちにラ氏の説を尤もと悦ぶ筈である。尙今日の新主張である、エレレケーの「子供は親を撰ぶ権利がある」とか、又ユーゼニツクスの説く所などを知る我々には、結婚に就いては、今一層重大な深重な意味を認めて居る。即ち「結婚は自分等よりも勝れたる人類を此世に生せしめんとする男女二人の神聖なる意志によつてなされるもの」である。眞に確實な足取りを以て人生を歩み初める最初の時は茲にある。此の宇宙の大生命と自己一身との離るべからざる關係を知るのも茲に始まらう。但し現實の世には人々の身にまつはる事情といふものがある。殊に現今の我が國の社會には結婚問題に就て一層に此の事情といふものが強く働いて居る。敢爲なる方面の我が精神は、新しい合理的の道を開いて進めと教へるが、臆病な方面の我が心は、長上監督者の監守指揮の下に何事でもなすの心配なさを強く味はつて居る。その機を慎むことの特に大切なる此の結婚問題などに就いては、私は年少の弱輩は如何な場合にも年長の監督者の主張に十分に耳を傾ける必要がある事を眞面目に思つて居る（未完）

#### 女子教育及び婦人問題に關する參考書（前ノツキ）

村田天籟	婦人の心理	實業之日本社	明治四四、	六〇
今井政吉	女の心理	東海堂	四四、一〇	五五
○吉田熊次	女子の研究	同文館	四四、一一	一、四〇
○ハツエロツクエリス著	性的特徴	警社	大正三、	一、五〇
○小倉清三郎譯	徵			

### 談

### 叢

## 婦人問題

下田次郎

昔の生活は知力の競争であつたのみならず、又腕力の競争であつた。従つて、その優秀なる者が劣弱なる者を制して、獨り權力を専らにしたのである。而して教育は重に男子がうけたのであるし、腕力は勿論男子が強いのであるから、其の優者は常に男子であつて、女子は常に從屬の位置に居なければならなかつた。然るに十九世紀殊に其の後に至つて教育に於て男女に均等の機會が與へられる様になつた爲に、或る度までは、知力に於て男女が同等になり得るに至つた。又昔の仕事は腕力によるものが多かつたが、物質的文明が發達して機械の使用が多くなるに従つて、腕力は必ずしも競争上必要なものでなく、女の弱い腕でも機械を使用すればどんな力でも出せるし、巧妙な働を機械にさす事が出来る様にな

つた。例へば米國で大きな建築に、昇降器が幾つもある。その昇降は電氣のボタンを指一つで押せば出来るのである。大男が何人もよつて汗水を流して働くよりも、女のか弱い指一つの方が力のある仕事をするのである。そうなるに競争に大切なのは体力ではなくて智力で、頭である。どんな大男でも教育をうけない者は弱者で、教育をうけた女子で機械を用ひる者には下らねばならぬ事になる。従つて教育をうけた者の方が勝てた。体力の強弱のみを以て、優劣を論ずる事は出来なくなつて來た。もとより今でも男子の体力を要する仕事も澤山あるが、機械によつて、又頭の働によつてする仕事が多くなつて來たので、そこには男女によつての區別はなくなつて、能力による區別があるのみである。従つて、從來男子の領分であるとのみせられた仕事を、婦人がドン／＼蠶食して、男子の特權とせられたものを奪ふ様になつた。従つて婦人の職業問題といふ事も起つて來る事になつた。これは唯パンの問題としてのみでなく、職業の質の問題である。今日は婦人の職業の範圍が益々ふえて來た。これまで夢にも思はなかつ